12　明治期以降第二次世界大戦前の“スペインかぜ”・インフルエンザ超過死亡と罹患，死亡

逢見　憲一
国立保健医療科学院 生涯健康研究部

【目的】わが国の“スペインかぜ”を含むインフルエンザによる健康被害を定量的に把握し，わが国の衛生行政における認識の変化を検討する．

【方法】月別あるいは年次別死亡を用いて，1899～1938 年のインフルエンザによる超過死亡数・率を算出し，人口動態統計のインフルエンザ死亡および内務省衛生局『流行性感冒』の流行性感冒罹患数・死亡数と比較した．

【結果】1．1918–20 年パンデミック（“スペインかぜ”）による超過死亡数及び率：わが国の，“スペインかぜ”を含むインフルエンザによる超過死亡率（千人あたり）は，1918（大正 7）年 11 月 2.73，12 月 0.86，1919（大正 8）年 1 月 0.42，2 月 0.54，3 月 0.42，4 月 0.22 で，1918–19 年の前流行の超過死亡率は，計 5.16 であった．1919（大正 8）年 12 月 0.22，1920（大正 9）年 1 月 1.35，2 月 0.94，3 月 0.55，4 月 0.24 で，1919–20 年の後流行の超過死亡率は，計 3.28 であった．

2．1899–1900～1941–42 年の超過死亡数・率：“スペインかぜ”に先立つ 1899–1900 年から 1917–18 年の年平均超過死亡率（千人あたり）は 0.05，“スペインかぜ”パンデミック期の 1918–19 年と 1919–1920 年の 2 年間は 4.22，“スペインかぜ”後の 1920–21 年～1937–38 年は 0.39 であった．また，“スペインかぜ”パンデミック期の 2 年間の超過死亡数の合計は，465,690 人，“スペインかぜ”後の 18 年間の合計は，476,828 人であった．

3．人口動態統計インフルエンザ死亡数の，超過死亡数に対する比（人口動態 / 超過死亡）は，“スペインかぜ”前には，0.1 前後であったが，流行期には高く，前流行期には 1918 年 11 月の 0.30 から翌年 4 月の 0.41 まで，後流行期には 1919 年 12 月の 0.36 から翌年 4 月の 0.81 まで上昇していた．しかし，流行後には再び低下し，0.1～0.2 前後であった．

4．『流行性感冒』罹患数の，同死亡数に対する比は，前流行期には，1918 年 10 月～翌 1 月の 92.3 と非常に高かったが 4 月には 20.1 まで低下していた．同様に，後流行期には 1919 年 12 月までの 35.2 から，翌 4 月には 9.3 まで低下していた．同様に，『流行性感冒』死亡数の，人口動態死亡数に対する比は，前流行期同期間には 2.86 から 1.16 まで低下し，後流行期同期間には 1.19 から 0.79 まで低下していた．さらに，『流行性感冒』死亡数の超過死亡数に対する比は，前流行期同期間に 0.97 から 0.47 まで低下し，後流行期には，0.4～0.7 前後であった．

【考察】1．“スペインかぜ”パンデミック期の超過死亡の 60% 近くが前流行において発生し，うち 40% 以上が 1918 年のうちに発生していた．また，80% 近くが 1920 年 1 月までに発生していた．一方で，内務省衛生局による流行性感冒予防心得の大量配布は 1920 年 1 月 19 日，予防ポスターの配布は 1920 年 2 月 7 日以降，欧米各国への衛生局技師等の派遣は，1920 年 5 月以降のことであった．

2．“スペインかぜ”流行後は，流行前に比べて，約 10 倍の超過死亡率がみられた．また，流行後の超過死亡数の合計は，流行期の超過死亡数に匹敵していた．

3．人口動態統計においては，流行期には，インフルエンザとされる死亡数が増えたと考えられる．一方で，内務省衛生局では，前後流行期とも，初期には，罹患と死亡が報告されやすかったが，やがて報告されにくくなる傾向，すなわち報告に対する慣れ，飽き，回避などの，いわば“報告疲れ”が生じ，後流行の終わりには，人口動態統計のインフルエンザ死亡すら下回っており，第二次世界大戦前の警察による衛生行政の限界を示唆しているのではないかと考えられる．